

〔書評〕

小助川元太著 『行誉編』 『壺囊鈔』 の研究

鈴木 元

『壺囊鈔』のごとき書物が、文学研究の対象として正面から論じられるようになったのは、はたしていつのころからであったろうか。

とりわけ中世文学分野において研究対象の拡散が進行する中で、「中世文学の範囲」が学会シンポジウムのテーマとして掲げられたのは、平成元年のことであった。当該シンポジウムのパネラーの一人であった島津忠夫氏は、このシンポジウムの趣旨について、「こうした中世文学の研究の対象が無限に広がってゆく傾向にいちおうの反省はしておく必要がある」と、感想を記しておられた（『中世文学』第三十五号に拠る）と、感想を記しておられる。どうやらテーマ設定の意図は、明示的に講師に告げられてはいなかったらしいのだが、島津氏の推測という限定を含むものの、この時期に、研究対象の拡散状況への「反省」が研究者の意識のほりはじめていたらしい事情が窺われる。既に二十年以上昔のことである。

シンポジウム当時に溯っても、すでに「私たちより若い世代の

人は、「中世文学の範囲」を問題にすること自体、あまり意義のあることとは思っていないらしい」と島津氏が感想を述べるような状況が進行しつつあったわけだが、今日においてはなおのことであろう。確かにこうした論題を立てること自体が、もはや時宜にあわなくなりつつあるのかもしれないが、行誉および『壺囊鈔』の専論である本書を前にして、一度はこうした問題にたちかえてみることも必要な気がしている。それは、『壺囊鈔』を論ずるうえで小助川氏のスタンスとも、深く関係しているように思われるからである。

著者のスタンスは、比較的明瞭に本書序論の「目的」の段に明かされている。曰く、「編者行誉による一つの作品として『壺囊鈔』を読むことである、と。類似した表現は、たびたび繰り返し返される。「自らのメッセージを込めた一つの作品と見る」「個人的な思いを表明する作品としての側面」等々——それは、まず一義的には、従来の研究史が『壺囊鈔』を「辞書」として遇してきたことへの著者なりの異議申し立てであり、同時に（冒頭の一文に呼

応することだが）文学研究の補助線として一部を利用するばかりで、統一体（作品）と見ようとしなかった盲点を突く主張であったのだろう。そしてそのことは、もうひとつ別の表現をとって掲げられる課題、『壺囊鈔』はいかなる書物なのであろうか」という設問に究極的には行き着くことになる。確かにそれは、室町期の学問を考えるうえできわめて重要な課題であり、その意味で強く支持されるものである。そしてこのような視角が、個々に発表された各論を一書にまとめるにあたっての便宜的設定などではなく、『壺囊鈔』を論じはじめた当初からのものであったことは、本書中で最初期に発表された『壺囊鈔』の「勸学性」（第一章）の「はじめに」に目を通すだけで、容易に知られることだ（ただし厳密にいえば、著者が壺囊鈔に注目しはじめてから「勸学性」の究明にいたるまでには、大きな転換があったらしく、そのことは「あとがき」に触れられている。なお、この稿は雑誌発表時の内容に若干の手が加えられて収録されているが、基本的な姿勢については変更はないと見てよい）。

では著者は、『壺囊鈔』を「いかなる書物」として明らかにしたいったか。

まずは第一編第一章「壺囊鈔」の「勸学性」における、『東山往来』『東山往来拾遺』からの影響の指摘。雑誌掲載時に一読し、かような往来物が参照典籍として行誉の著作に吸収されていた事実そのこと自体の指摘が、評者には甚だ刺激的な言及として記憶に残っている一編だが、今回の書評のためにこの論文を再読して

いて改めて思うのは、『壺囊鈔』という著述の性格把握の先進性である。単に『東山往来』および同『拾遺』からの表現上の影響をいうにとどまらず、既に『明衡往来』『庭訓往来』の名を挙げながら、『壺囊鈔』の話題と往来物のそれとの近似性に言及しており、その把握力の確かさは高く評価されてよい。ただし、『東山往来』の影響について「単なる引用書にとどまらない」との深い認識に立ちつつも、「あらゆる知識に通じることが道を志すものには必要であ」という『壺囊鈔』編者の「考え方」（三六頁）に関わる影響というように抽象化され、小さく纏められてしまふ時、そこに聊かの物足りなさを抱かざるをえなかったことも正直に述べておこう。

ただし往来物についての思索の結晶は、いましばらく時を待つ必要があったのかもしれない。小助川氏は「勸学性」についての論の発表（一九九七年）から間もなく、『庭訓私記』の注釈説話（『説話・伝承学』第七号、一九九九年）、庭訓往来注と雑談——『庭訓私記』の注釈説話を中心に——（『枯野』第十二号、二〇〇二年）という庭訓往来注の一本『庭訓私記』を扱った注目すべき論を公にしているからである（ただし著書としての統一性を重視されたためであろう、本書には収録されていない）。たとえば、本書中でも白眉とすべき一編『壺囊鈔』と雑談」の論は、活字としての公刊時で統一して示すならば二〇〇二年の発表。『康富記』を手掛かりとし、同時に『椿葉記』や『伊勢貞親教訓』等、皇族や武士など幅広い階層の学問にかかわる資料を見

渡しながら、時代の中で「雑談」が果たした教育的役割と意義を浮き彫りにすることで、『瑤囊鈔』という書物の基本的性格を規定してみせた鮮烈な論である。ゆえに『瑤囊鈔』とは何かという思索を継続しながら、庭訓往來の注釈世界への分析の手は伸ばされてきたわけである。恐らくは『瑤囊鈔』への注目の中に、「往來物」というジャンルそれ自体の孕む問題が形をなす契機があり、また往來物の注釈への関心が「雑談」という行為への思索を深めたのではないかと臆測する。

ところで小助川氏の場合、『瑤囊鈔』のその名状しがたい書物としての性格に向けた探究が、行誉その人とその撰述書とを総体的に把握しようとの志向になったのであろう、その事情は容易に推測が可能である。そして確かに、ひとつの資料が提供する情報と、今日の眼から無機質に均一な「事実」として受け止めるとき、そこから読みとる情報には様々な陥穽が待ちうけていることを思うなら、まずは徹底してその資料をそれ自身の生きていた時代と環境に据え直してみる必要があることは間違いない。そこに、「編者自身の言葉」「行誉の政道観」と題してまとめられた本書第一編、第二編の諸論考の意義があると見てよい。特に、第二編第一章「『瑤囊鈔』と式目注釈学」をめぐる問題は、行誉周囲の学問の場と幕府奉行人や評定衆との接点を暗示するもので、大きな意義をもつ指摘であるし、「編者行誉および観勝寺が、(清原)業忠や(中原)康富ら朝廷の実務官僚たちとの交流を持っていた」(一〇四頁)という事実は、僧坊の学問としてのみ『瑤囊

鈔』の知識・学問を見ることができないという、今後の研究に与つての重要な前提条件をなす指摘となっている。

だが、時代や環境の中でこの一書の在り方の究明という姿勢が、「一つの作品として」読むという主張で強調されるとき、私などはそこに微妙な違和感を感じ取らざるをえない。ここで確認しておくべきかと思うが、著者のいう「作品」には明らかに「文学作品」を含意している。それは、先にもふれた「勸学性」の論の「はじめに」において、濱田敦氏のことば(「一種の文学作品として」)を引くことにより、はっきりと宣言されていることである。もちろん、本書を評するにあたって、『瑤囊鈔』が文学作品として読めるか否かを争うのは妥当ではない。むしろ違和感の内実を提示して、その印象の妥当性の判断を広く仰ぐことこそが評者の責任といえよう。

仏書、往來物、歌書、説話集等々様々なテキストの引用から成る大いなる織物の確な呼称の与えがたい引用の集積体。雑多な知識の延々と続く開示。そうした見た目が、この浩瀚な書物に編者の意志を読むことを妨げていたことは、事実なのであろう。そして小助川氏が説くように、引用の羅列と見えるその背後に確固とした主張があったであろうことも認められる。しかし、逆にいえば何らかの意図、目的をもたぬ編纂物などありえないというのも常識的な事実だ。その当たり前の事実を前にして、必要以上に編者の「メッセージ」を細部に読もうとするのは、逆に巨大な引用の集積そのものから眼を背けることになってはいないか。ある

いは、テキストの部分部分から読み取った「勸学」の意識や「政道観」が、実は大いなるこの編纂物の「文学的」意義とは必ずしも有機的に交又してはいないのではないか。あるいはまた、話題の脱線を指摘する第一編第二章「瑠囊鈔」の知の主張は、私には本来、中世の註釈学の広い枠組みの中に据えて把握されるべきことと思われ、それを行誉の個性やその著作の特性として収斂させてしまふならば、それはあまりに性急と云わざるをえないようにも思う。

もう一つ気になるのは、該書が辞書的な分類体をとらないというところをもって、「塵袋」との距離をことさらに強調される序論の立場の問題。これも、該書を「作品として」読もうとする意志と密接につながるとみて誤るまい。そこに、「辞書の編纂物」たる「塵袋」と、「読む事典」(「作品」)である「瑠囊鈔」との対比的な構図を描き出そうとしていたように見受けられるが、そもそも、分類体の形式のみをもって「塵袋」を「辞書」として済ませてもよいものか。また逆に、「瑠囊鈔」が「下学集」以下中世古辞書とどうい切り離しえない位置をしめている事実を、ある意味で置き去りにする読み方になってはいはないか(それは享受史にかかわるところが多く、小助川氏の関心から外れるのかもしれない)。

冒頭に述べたように、文学研究の対象は現在では大きく変容している。こうした現状に対しては様々な意見や立場がある。だが、「瑠囊鈔」のごとき、ひとまずは雑書としか呼びびようのない

書物に対しても総体としての把握をめざすことは、文学研究の立場として無意味なことではない。ただし、追究の意義確認を急いで「文学的」作品としてのテーマや主張を求めるよりも、むしろ広く中世の学問世界へ開放することを優先する方が実り多いだろう。それが評者の立場である。「一見非文学的な素材に深入りし過ぎてるように見える今日の研究もいまは重要だと思ふ」(島津氏)という肯定の中に含まれた留保を忘れてはならないが、著者には中世文学の裾野の理解を促進するためにも、この雑書が「いかなる書物」かを問い続けていただきたい。本書刊行以後も著者による行誉追究は継続されており(醍醐寺所蔵「僧某年譜」考——『瑠囊鈔』編者に関する一級資料発見——、「國語國文」第七十七卷第二号)、本書は決して閉じられた環ではないのだから。

(三) 弥井書店、二〇〇六年九月九日、三一〇頁、本体価格六八〇〇円)

(すずき・はじめ 熊本県立大学)